

すでに縮小均衡の時代に転換！ 中国の『10年後』は陳雲人脈から読め

●第231回／鄧小平体制の危機を見抜く最新中国事情

その2

「中国では80年代初頭からの経済開放政策があちこちで破綻してきたので、今度は引き締めよう」と。つまり「放」から「収」です。その循環局面に入ったにもかかわらず、それに気づかないで日本企業がワラッと拡大基調で中国市場へ出ていったから、消化不良を起こした」

『み方』

最近、『10年後の中国』（第一企画出版）を著わした東京外国語大学教授・中嶋嶺雄氏は先週の本欄で、日中貿易の現状についてそう指摘した。氏によると、昨年後半に発生した断



統的な反日デモも、「放」から「収」の循環局面と無関係ではないという。しかも、その背後には、中国共産党内の根深い路線対立が隠されているというのだ。今週も、引きつづき中嶋氏をゲストに迎えて、新聞では分からない中国の内幕について聞いてみた。

自由化に釘刺す

「烏カゴ経済論」

竹村 現在、中国共産党の中には、同じ旧共産派の中から出た陳雲と鄧小平のふたつの派があったって対立しているという話ですけど、そもそも陳雲は、どういう人物なんですか。

中嶋 陳雲は、非常に輝かしい経歴を持っています。もともと植字工で、中国の总工会、すなわち労働運動にたずさわってきた。だから、劉少奇の直系ですね。そして、ソ連との結びつきが深いんです。人民路線の方針を採択した1935年のコミンテルン第7回大会に、彼は中国代表として出席しています。中

国は建国後、1952年にスターリンと中ソ同盟条約を結びましたが、当時、援助がもつとほしかった。そこで、ソ連との援助交渉を周恩来と一緒にやったのが、陳雲なんです。

竹村 日本では、ほとんど知られていませんわね。

中嶋 日本人で、鄧小平と公式に会った人はいません。日本の指導者がいって、会いたがらない。

竹村 ただ、鄧小平路線の経済開放政策は、人民が歓迎していることもあり、もうポイント・オブ・ノーリタ

は、陳雲も鄧小平もともに、文革とか毛沢東型のことをやったのでは、中国はダメになる、との点では一致している。華国鋒批判でも一致していますね。

竹村 二人ともブラグマチストですか。

中嶋 そうですね。鄧小平に比

ーンを越えたという見方がありますけど。中嶋 考えなければいけないのは、陳雲路線とは何かということだと思いません。毛沢東路線ではないわけです。その意味では、毛路線まで逆流することは、ない。というの



■イラスト／太田宏明

竹村健一 『世界の読』



べて、陳雲はよりオーソドックスな社会主義者といっている。彼には、鳥カゴ経済論、というのがあって、毛沢東のようにスキ間のないカゴにする

と、農民は窒息しちゃう。かといって、鄧小平のようにカゴがなきゃ鳥は逃げてしまう。カゴはあくまで、鉄でしっかりしたものを作っておく必要がある。その枠組みは、社会主義だ。

竹村 なるほど。

中嶋 鄧小平は従来の枠を壊してワープと活性化する拡大均衡型の指導者ですけど、陳雲は縮小均衡型の指導者ですね。だから、いまのようにあちこちにヒズミができたときは、陳雲路線が正統で、鄧小平路線が異端になる。中国の流れはいままで、右に寄っていた。日本やアメリカは右岸に立って、よるこんでいた。しかし、うまくいかなかったたので、今度は左のほうへ蛇行しはじめているということなんです。こうした蛇行は、今後も繰り返されるでしょうね。

ソ連側から見た 中国像に注目

竹村 鄧小平派にくらべて、陳雲たちの数は少ないんですか。中嶋 いや、僕は、そうみないですね。六対四ぐらいだと思います。

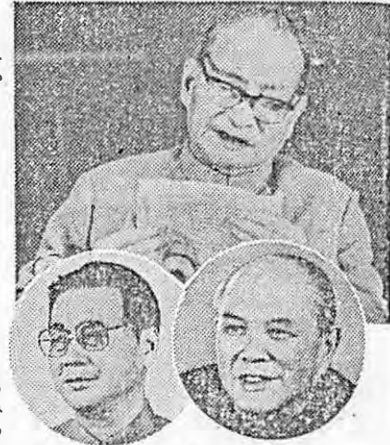
竹村 陳雲派が六ですか。

中嶋 いや、陳雲派が四で、鄧小平が六か、あるいは五分五分くらいですね。

というのは、陳雲に代表される鄧小平批判の潮流は、ある種の連合戦線なんです。北京市長をやった彭真、李先念、周恩来系統の人も、鄧小平に対して批判を持つでしょうからね。それから、陳雲グループは、僕がこの間会ってきた李鵬副首相とか、経済を担当する姚依林とか、かなりの人脈を持っています。鄧小平のほうは、どちらかというと、共產主義青年団のエリート、青年将校です。

竹村 ソ連は、中国をどうみているんですか。

中嶋 ソ連は、自分のほうに寄



陳李 (上) 評価している。 (左) 姚依林は、い。 (中) 鄧小平は、い。 (右) 李鵬は、い。 (下) 鄧小平は、い。

らみると、陳雲、李鵬、姚依林、……こういう人たちを通じて中国がみえてくるんです。

竹村 結局、日本は自分の鏡をみてしまうんだな。その鏡のウラ側に何があるか、あまりみないんだ。人間というのは、自分の都合のいいように解釈する。

中嶋 とにかく、陳雲は、日本の政財界人の誰とも会っていない。だから、日本人はソ連側から見た中国の姿、イメージというものが、なかなか理解できない。

竹村 どうしてですかね。

中嶋 会いたがらないんです。日本の外務省なんか、コンタクトできない。昨年9月の全国代表会議でも、最後には陳雲が演説するなど、その実力は明らかなんですけどね。

竹村 日本の新聞には、鄧小平のことは載っても、まず陳雲のことは載らない。

中嶋 鄧小平は大変な政治家ですけど、次々といろんな人を斬ってきたから、敵が多い。ところが、陳雲は大事なときにはモノをいうけど、ふだんはあまり目立ちたがらない。

竹村 もうちょっと陳雲サイドの情報とれたら、一連の反日運動もあるいは未然に防げたかもしれないわけですね。

中嶋 そうですね。

竹村 それにしても、最近の報道では、新華社発行の『半月談』誌が、マルクス主義の限界を大胆に突き破って行かなければならない、という論文を掲載するなど、鄧小平路線サイドの反撃も活発なようですな。

中嶋 鄧小平路線は、いま胸突き八丁にきて、いよいよ峠にさしかかろうとしている。陳雲グループとの対立があっても、あと二、三年で峠まではなんとかいくでしょう。問題は、そのあとどうなるか……。

竹村 そが、今後の中国をみるポイントというわけですね。

WORLD CONFIDENTIAL WORLD CONFIDENT